

## ヘーゲル『論理学』における「反省」の構造

岡本，裕一郎

<https://doi.org/10.15017/2328560>

---

出版情報：哲學年報. 45, pp.183-213, 1986-02-28. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：



# ヘーゲル『論理学』における「反省」の構造

岡 本 裕 一 朗

## (一)

本稿の課題はヘーゲル『論理学』<sup>(1)</sup>における「反省 Reflexion」の構造を明らかにすることである。『論理学』は「存在論」・「本質論」・「概念論」の三部から構成されているが、「反省」は第二部「本質論」の冒頭において論じられる。それ故、我々はこの章を主題的に考察しなければならない。しかし、この章は『論理学』全体においていかなる意義をもっているのだろうか。何故我々は『論理学』のなかで、他ならぬこの章を取扱う必要があるのだろうか。

我々はまず、「反省」が「本質論」全体を支配している根本規定であることを確認しなければならない<sup>(2)</sup>。このことを、ヘーゲルは次のように表現している。「本質は反省である」。(WdL. 243, 249) だからこそ、「反省」は「本質論」の冒頭で論じられたのである。とすれば、「反省」の十分な理解なしには、「本質論」へ近づくことは不可能である、と言える。

さらに、「反省」は『論理学』全体に対して、きわめて重要な意義をもっている。ヘンリッヒは次のように言っている。「それなくしては論理学が全く叙述されない諸概念の多くが、まさに反省の論理学のこの章において明確に形式存在論的分析の対象とされている」<sup>(3)</sup>。そうであれば、「反省」は『論理学』において何よりもまず主題化すべき章であるだろう。では、我々は『論理学』における「反省」をどう理解したらよいのだろうか。

「反省」は近世哲学において、基本的に二つの意味をもっている。一つはロックに由来する「内部感覚」であり、もう一つはカントに由来する「相関関係」である。<sup>(6)</sup> それではヘーゲルの「反省」はこの近世哲学の伝統に従って理解することができるだろうか。

まず、「内部感覚」に対して、我々はヘーゲルの次の言葉を提示するだけで十分である。「ここで問題にしているのは、意識の反省ではなく……反省一般である。」(WdL, 254) 『論理学』における「反省」は、「内部感覚」としては考えられていない。それでは、「反省」を「相関関係」として理解することはどうであろうか。

従来の解釈では、ヘーゲルの「反省」はこの「相関関係」から理解されてきたように思われる。<sup>(6)</sup> 「反省」は相関的な二項の相互媒介を意味する、という具合に。その際、「光の反射 Reflexion」の表象がしばしば援用された。<sup>(7)</sup> しかし、こうした「相関関係」から『論理学』における「反省」を理解することができるのだろうか。

確かに、ヘーゲルは『エンチクロペディー』の「論理学」において言っている。「本質の立場は一般に反省の立場である。」<sup>(8)</sup> 「本質では規定は相関的であるにすぎない。」<sup>(9)</sup> とすれば、「反省」を「相関関係」から理解することには何ら問題がないように見える。これに対して、我々は次の事実を指摘しなければならない。すなわち、『論理学』の「本質論」では第一章において「反省」が論じられ、その後で第二章「反省諸規定」へと進んで行くのに対して、『エンチクロペディー』の「本質論」では「純粋な反省諸規定」が最初の章なのである。とすれば、「反省」論は『エンチクロペディー』において省略されているように思われるのである。そうであれば、「反省」を『エンチクロペディー』に基づいて理解することは方法的に疑わしいのではないだろうか。『論理学』だけが「反省」論を展開しているのであれば、「反省」は『論理学』に基づいて理解されなければならない。では、『論理学』では「反省」を「相関関係」から理解することができないだろうか。我々は簡単に検討してみよう。

この問題を考えるために、我々は「反省」と「反省諸規定」を区別しなければならない。このうち、「反省諸規定」

が「相関関係」であることは認めなければならない。<sup>(11)</sup>ヘーゲルは次のように述べている。「反省規定は自己の他在を自己の内に取り戻してしまっている。反省規定は措定された存在・否定であるが、しかしそれは他者への関係を自己の内へ曲げ戻しており、(……)自己自身と自己の他者との統一である。」(WdL, 257) それでは、「反省」はどうだろうか。

「反省」を「相関関係」から理解する場合、相関的な二項とは何であろうか。『論理学』において「反省」が提示されるのは、「本質」と「仮象」の関係においてである。それ故、「反省」は「本質」と「仮象」の「相関関係」という仕方<sup>(12)</sup>で理解されるであろう。しかしながら、「本質」と「仮象」の関係は「相関関係」として論じられているとは思えないのである。さらに、「反省」が「相関関係」であるとすれば、何故ヘーゲルは「反省」を展開した後で、はじめて相関的な「反省諸規定」へ到達したのだろうか。これは結論先取の誤りにならないだろうか。『論理学』の展開は「反省」から「反省諸規定」へなのであるから、「反省」の内に「相関関係」を前提することは論理的に疑わしいのではないだろうか。

しかし、『エンチクロペディー』では、「純粋な反省諸規定」から「本質論」が始まるのだから、「反省」は「相関関係」から考えられているのではないだろうか。とすれば、我々は『論理学』と『エンチクロペディー』の単なる差異を主張したにすぎないことになるだろう。この場合、「反省」を『論理学』に基づいて理解すべき決定的な理由は見出せないと思う。実際、マックタガルトは『エンチクロペディー』が「反省」論を省略しているという理由で、『エンチクロペディー』の方が『大論理学』より優れている」と断定する。<sup>(13)</sup>しかし、我々は『論理学』と『エンチクロペディー』の単なる差異を主張しているのではない。『エンチクロペディー』における「反省」は『論理学』に基づいて理解されなければならないと思う。それは何故か。我々は『エンチクロペディー』を簡単に検討しなければならぬ。

『エンテクロペディー』を注視すれば、「反省」が「本質論」の序論において言及されているのに気付くであろう。とすれば、「反省」論は『エンテクロペディー』において単に省略されたわけではないのである。「反省」論は確かに本論からは削除されたが、しかしこれに相当する部分は序論へと移されたのである。そうであれば、『エンテクロペディー』においても、「反省」から「反省諸規定」への展開が遂行されているはずである。序論において「反省」が論じられることなくしては、本論を「純粹な反省諸規定」から始めることができなかつたのである。かくして、『エンテクロペディー』の展開は『論理学』と同一である、と言わなければならない。

しかし、そうであれば、「反省」論は何故序論へと移されたのだろうか。この疑問は当然生じると思う。これは従来の解釈からは理解することができない<sup>112</sup>。これに対して、我々は、「反省」が「相関関係」ではないからである、と答えたい。『エンテクロペディー』の本論は「反省諸規定の体系」であつて、総じて相関的な諸規定を取り扱うが故に、「反省」論は本論に属することができないのである。『論理学』における「反省」は、『エンテクロペディー』において明確な形で位置づけられたわけである。かくして、『エンテクロペディー』に即してもまた、「反省」を「相関関係」から理解することはきわめて疑わしいことが明らかである。

さらに、「反省」を「相関関係」から理解することは、「反省諸規定」に対してさえも誤解をひき起こすだろう。というのも、「反省諸規定」は「反省諸規定」として、あくまでも「反省」から理解されるべきだからである。そこで、「反省諸規定」について簡単に検討してみよう。

「反省諸規定」は「相関関係」である、と言われた。この場合、「相関関係」はどのように理解されるべきだろうか。一般に「相関関係」が考えられるとき、その強調点は「他者によって媒介されていること」にあるように思われる。AはBなしには存立することができず、Bとの関係においてはじめて意味をもつ。この意味での「相関関係」から「反省諸規定」を捉えるとすれば、それが「反省諸規定」である所以は隠されてしまうと思う。ヘーゲルは「反省諸

規定」の二つの契機を「他者への関係」と「自己への還帰」として示し、後者の「自己への還帰」を「自己内反省」と考えている。とすれば、「相関関係」に対する素朴なイメージによって「反省諸規定」を考えることは、「反省諸規定」の真の意味を捉えることができない、と言わなければならない。

かくして、『論理学』における「反省」の構造を明らかにする、という我々の課題は次のように展開される。第一に、「本質」と「仮象」の関係が解明されなければならない。「反省」が「相関関係」でないとするれば、「本質」と「仮象」の関係はいかなるものであろうか。第二に、「反省」から「反省諸規定」への展開が考察されなければならない。「反省」と「相関関係」の関係は「反省」から「反省諸規定」への展開において問題となるであろう。この課題を遂行することによって、我々は『精神の現象学』の序文の「主体」へと導かれるであろう。というのも、「主体」は「自己内反省」として語られているからである。

## (二)

我々の最初の課題は「本質」と「仮象」の関係を明らかにすることである。ところで、ヘーゲルはこの関係を二段に分けて論じている。「(1)仮象を本質から区別する諸規定は本質自身の諸規定であり、(2)仮象である本質のこの規定態は本質自身の内で止揚されている、ということのみが示されるべきである。」(WdL. 247 数字は筆者)それ故、我々は、(1)、(2)に分けて「本質」と「仮象」の関係を明らかにしよう。

### (1)

ヘーゲルはいかにして「仮象を本質から区別する諸規定は本質自身の諸規定である」ということを示したのだろうか。このことを我々はまず考察しなければならない。

ヘーゲルは「仮象」の分析によって、「空無態 *Nichtigkeit*」と「直接態 *Unmittelbarkeit*」とらう規定を取り出

す。「仮象」は「空無」なものであって、一種の「非存在」であるが、しかし同時に「直接的」に「存在」する、という「逆説的な性格」<sup>(13)</sup>をもっている。それ故、「仮象」の「空無態」は「自体的に存在する否定態」と呼ばれ、「仮象」の「直接態」は「自己の否定を媒介としてのみ存在する、反省された直接態」と呼ばれるのである。

このように、「仮象の諸規定」として「空無態」と「直接態」を取り出した後で、ヘーゲルはそれらが「本質自身の諸規定」であることを示す。第一に、「空無態」について次のように言われる。「仮象をなしているのは非存在の直接態である。この非存在はしかし、本質のそれ自身のもとの否定態には、かならない、nichts anders als。存在は本質において非存在である。存在の自体的な空無態は本質自身の否定的な本性である。」(WdL, 247) 第二に、「直接態」について次のように語られる。「この非存在が含む直接態は、本質の絶対的な即自存在である。本質の否定態は本質の自己自身との相等性であり、すなわち本質の単一な直接態であり没交渉態である。存在が本質において自己を維持するのは、本質がその無限の否定態において自己自身とのこの相等性をもつかぎりにおいてである。これによって、本質はそれ自身存在である。規定態が本質に対して仮象のもともっている直接態は、それ故本質自身の直接態には、かならない、nichts anders als。しかし、それは存在する直接態ではなくて、端的に媒介された、すなわち「反省された直接態である。」(WdL, 247f.) かくして、ヘーゲルは次のように結論する。「本質における仮象はある他者の仮象ではなくて、自体的に仮象であり、本質自身の仮象である。」(WdL, 248)

この箇所において、「本質」と「仮象」の関係はきわめて簡潔に述べられており、これ以上の説明が与えられていない。しかも、この議論のポイントとなるのは、「否定態」・「直接態」という多義的な概念である<sup>(14)</sup>。それ故、この箇所を理解するのは非常に困難である。しかし、この箇所の理解なくしては、「本質」と「仮象」の関係を明らかにすることができないと思う。では、この箇所はどう理解すればよいのだろうか。

ここでは、「本質」と「仮象」の「相関関係」が語られていると考えられるかもしれない。その場合、この箇所は

次のように読み変えられるはずである。第一に、「仮象の空無態は本質の否定態に媒介されている。」第二に、「仮象の直接態は本質の直接態に媒介されている。」

或いは、ここでは単なる「対応関係」が語られているにすぎない、と考えられるかもしれない。すなわち、「本質」にも「否定態」と「直接態」が帰属し、その各々が「仮象」の「空無態」と「直接態」に対応するわけである。

この二つの解釈にはある共通の前提が存している。それは「本質」と「仮象」を二つの異なる項として想定することである。この前提に基づいて、二つの項の「相関関係」或いは「対応関係」が議論されるのである。しかし、この箇所では、「本質」と「仮象」は二つの異なる項として考えられていない。トイニッセンも指摘するように、「:」にはかならず *nichts anders als* はまじめに受け取られなければならない<sup>(16)</sup>。すなわち、「仮象の非存在は本質のそれ自身のもとでの否定態には、かならない。」(「仮象の」直接態は本質自身の直接態には、かならない。)言いかえると、「仮象の空無態」は端的に「本質の否定態」であり、「仮象の直接態」は端的に「本質の直接態」である<sup>(17)</sup>。では、このことは一体いかなることなのだろうか。我々は、「否定態」と「直接態」の概念に即して見てみよう。

第一に、「仮象の空無態」が「本質の否定態」である、というのはいかなる意味なのだろうか。それは、「仮象の空無態」が「本質の否定態」によって生じることである、と考えられるかもしれない。すなわち、「仮象」が空、無であるのは、「本質」が「仮象」を否定、するからである、と。しかし、もしそうだとすれば、「仮象」の「空無態」否定されること、「本質」の「否定態」否定することになるであろう。それ故、二つの「否定態」は全く意味が異なるのであって、それらが「である」によって結びつけられる場合、「詭弁」に陥ることになるのではないだろうか<sup>(18)</sup>。しかし、果たしてそうなのだろうか。

「仮象の空無態」というのは、「本質」によって「否定されること」ではない。却って、ヘーゲルは「仮象の自体的な空無態 *Nichtigkeit an sich*」と語っている。これは「仮象がそれ自身のもとで空無であること」である。それ

故、「仮象の空無態」というのは、「仮象が自己を否定すること」を意味する、と考えなければならぬ。また、このことは「本質の否定態」についても言うことができるのである。「本質の否定態」というのは、「本質が仮象を否定すること」ではなくて、「本質が自己を否定すること」なのである。「本質のそれ自身のもとでの否定態 *die Negativität des Wesens an ihm selbst*」と云う表現がそのことを示している。

かくして、「仮象の空無態」が「本質の否定態」である、ということをお我々は次のように定式化できるだろう。「仮象が自己を否定すること」は「本質が自己を否定すること」である。

第二に、「仮象の直接態」が「本質の直接態」である、というのはいかなる意味なのだろうか。「直接態」は「自立態」を意味すると考えられるかもしれない。しかし、そうだとすれば、「仮象の直接態」と「本質の直接態」は二つの「自立態」であることになるだろう。それ故、この二つの「直接態」を「である」によって結びつけることは不可能になるはずである。では、「直接態」をどう考えればよいのだろうか。

ここで、「直接態」が「即自存在」として言い換えられている点に注意したい。「即自存在」というのは「自己との相等性」を意味している。ヘーゲルは「定在論」において次のように語っている。「定在は他者へのその関係に對立した自己への関係としての存在であり、その不等性<sup>(19)</sup>に對立した自己との相等性としての存在である。このような存在が即自存在である。」(WdL. 62)とすれば、「直接態」は「自己との相等性」を意味するであろう。それ故、「仮象の直接態」は「仮象が自己と相等であること」であり、「本質の直接態」は「本質が自己と相等であること」でなければならぬ。

かくして、「仮象の直接態」が「本質の直接態」である、ということをお我々は次のように定式化することができるだろう。「仮象が自己と相等であること」は「本質が自己と相等であること」である。

第一のものと第二のものは統一的に理解されなければならない。「仮象」について次のように言うことができる。

「仮象は自己を否定することを通して自己と相等である。」また、「本質」について次のように言えるだろう。「本質は自己を否定することを通して自己と相等である。」このような理解が恣意的でないことは、ヘーゲルの次の言葉が示していると思う。「本質は自己の無限の否定態において自己自身との相等性をもっている。」それでは、このような「仮象の諸契機」と「本質の諸契機」が「∴にはかならない」、すなわち「である」によって結びつけられるのはどう考えればよいのだろうか。

ここで生起しているのは、一箇同一の事態である。この事態は「仮象」に即して見れば、「仮象が自己を否定することを通して自己と相等であること」であり、「本質」に即して見れば、「本質が自己を否定することを通して自己と相等であること」である。言いかえると、「本質が自己を否定することを通して自己と相等であること」は、「仮象が自己を否定することを通して自己と相等であること」としてのみ生起するのであって、そのほかの仕方では働らくのではないのである。

このように考えるならば、「本質」と「仮象」の関係が「相関関係」でないのは明らかだろう。ここでは、「本質」と「仮象」の相互媒介が語られてはいないのである。このことは、(2)の考察によって、より一層明確になると思う。

(2)

「本質」と「仮象」の関係を理解するために、我々は次に(2)「仮象である本質の規定態は本質自身において止揚されている」ということを検討しなければならない。この(2)によって「本質は反省である」ということが導出されるのであるから、(2)の検討は「反省」を理解するためにも重要であるはずである。それでは、(2)はどのように理解すればよいのだろうか。

ヘーゲルは、(1)において「仮象の諸契機」が「本質の諸契機」であるということを示した後で、次のように議論を展開する。

① 仮象は存在の規定態における本質自身である。本質が仮象をもつのは本質が自己の内で規定され、それによって本質の絶対的な統一から区別されていることによるのである。しかし、この規定態は同様に端的にそれ自身のもとで止揚されている。というのも、本質は、本質自身であるところの自己の否定を通して自己を自己と媒介するものとして存在しているところの、自立的なものであるからである。かくして、本質は絶対的な否定態と直接態との同一的な統一である。――

② 否定態は自体的に否定態である。否定態は否定態の自己への関係であるから、否定態は自体的に直接態である。しかし、否定態は自己への否定的な関係であり、自己自身を突き放しつつ否定することであるから、自体的に存在する直接態は否定態に対立する否定的なもの、すなわち規定されたものである。しかし、この規定態はそれ自身絶対的な否定態であり、また規定することは規定することとして直接に規定すること自身を止揚することであり、自己への還帰である。

③ 仮象は存在しているが、しかしある他者の内で、すなわち自己の否定の内で存在をもっている否定的なものである。仮象はそれ自身のもとで止揚され無的である非自立的なものである。それ故、仮象は自己へと還帰しつつある否定的なものであり、それ自身のもとで非自立的なものとしての非自立的なものである。否定的なもの、すなわち非自立的なもの、自己へのこの関係は否定的なものの直接態である。直接態は否定的なものとは異なるものである。直接態は否定的なものの自己に対立する規定態であり、否定的なものに対する否定である。しかし、否定的なものに対する否定は自己自身のみ関係する否定態であり、規定態そのものの絶対的な止揚である。

④ ①本質における仮象である規定態は無限の規定態である。それは自己に合致する否定的なものであるにすぎない。かくして、それは規定態として自立態であって、規定されていない規定態である。――⑤反対に、自己自身に關係する直接態としての自立態は同様に端的に規定態であり契機であって、自己自身に關係する否定態としてあるにす

ぎない。④直接態と同一な否定態、そして否定態と同一な直接態が本質である。従って、仮象は本質自身であるが、規定態における本質である。しかし、この規定態は本質の契機にすぎないような規定態である。かくして、本質は自己自身における本質の仮象すること *das Scheinen des Wesens in sich selbst* である。」(WdL. 248f. 番号、記号は筆者)

この箇所を説明することなくしては、我々は「本質」と「仮象」の関係を明らかにすることができないであろう。しかも、この箇所の帰結として「反省」が導出されるとすれば、この箇所の説明は「反省」を理解するためにも不可欠であるだろう。それにもかかわらず、この箇所の展開を説明する試みはほとんどなされていないのである。<sup>(21)</sup>むしろ、この箇所のいくつかの言葉をつなぎ合わせて勝手に改竄、積た積たされることが生じれば見受けられる。こうしたことが生じるのは、「本質」と「仮象」の「相関関係」という先入見に支配されているからではないだろうか。というのも、こうした先入見に基づいてはこの箇所を理解することができないし、もし理解しようとするればテキストに暴力を加えなければならないからである。とすれば、この箇所の展開を明らかにすることによって、我々は「本質」と「仮象」の「相関関係」という先入見を決定的に打破することができるだろう。

では、いかにしてこの箇所の展開を明らかにすることができるのだろうか。我々はまず全体の連関に着目しなければならぬ。①から④までの関係はどのようになっているのだろうか。これについて、①から④までのすべてが「本質」と「仮象」の関係を論じている、と考えられるかもしれない。もしそうだとすれば、①から④までの議論に差異はなく、ただ同じ事が表現を変えて繰り返されていることになるだろう。その場合、基本的には①の議論だけで済むはずであって、そのほかの議論は不要になるのではないだろうか。<sup>(22)</sup>果たしてそうだろうか。

確かに、①で論じられているのは「本質」と「仮象」の関係であるだろう。しかし、②では「本質」のみが論じられ、また③では「仮象」のみが議論されているのではないだろうか。そして、④は②と③の議論の総括としてあり、

①と②においてそのことが確認され、④の⊙はこの箇所全体の結論をなしている、と考えられる。それ故、①から④は決して同じ事の繰り返しではなく、全体として統一を形づくるのである。このことを確認するために、我々は①から④までの各々を順次考察することにしよう。

①「仮象の諸規定」が「本質自身の諸規定」である、ということを示した後で、ヘーゲルは「仮象」を「本質」の展開の内に位置づける。「本質が仮象をもつのは、本質が自己の内で規定され、それによって本質の絶対的な統一から区別されていることによるのである。」すなわち、「仮象は存在の規定態における本質自身である。」しかし、ヘーゲルは即座に次のように続ける。「この規定態は同様に端的にそれ自身のもとで止揚されている。」ここでの論理を我々はどう理解すればよいのか。

「仮象」が「本質」の「規定態」と言われる場合、「仮象」は「本質の否定」である。しかし、単なる「否定」であるとすれば、「仮象」は「本質」とは異なる他者であるにすぎない。それ故、この「否定」は再び否定されなければならぬ。「規定態が止揚される」というのは、「否定の否定」を意味するのである。

だからこそ、ヘーゲルは「本質」を「絶対的な否定態」として規定することができたのである。というのも、「定在論」で既に定式化されているように、「絶対的な否定態」は「否定の否定」を意味するからである。<sup>(23)</sup>

ここで注意すべきであるのは、この「絶対的な否定態」が、「本質」から「仮象」へ(第一の否定)、「仮象」から「本質」へ(否定の否定)という往復運動ではない、ということである。「絶対的な否定態」は「本質」と「仮象」の区別が止揚されていることである。それ故、「仮象は本質それ自身である」と語られるのである。「仮象」はそれ自身「本質」として捉えられるわけである。

それでは、「直接態」というのはどう考えればよいのだろうか。この「直接態」は「仮象」を指示する、と考えられるかもしれない。そうだとすれば、ここで「本質(絶対的な否定態)」と「仮象(直接態)」の統一が語られている

ことになるであろう。このように解釈すれば、「本質」と「仮象」の「相関関係」という先入見にうまく適合するように見える。

しかし、ここで「直接態」というのは、「本質」の「直接態」でなければならない。ヘーゲルは「直接態」について述べる前に、「本質」について「自己を自己と媒介する」と語っている。「自己を自己と媒介する」というのは「自己への関係」・「自己との相等性」であって、これが「直接態」を意味する概念であることは既に明らかにされた。それ故、「自己と相等である」という意味において、「本質」は「直接態」である。

かくして、①は次のように理解することができる。「本質」は「否定の否定」として「絶対的な否定態」であり、それによって「自己と相等である」が故に「直接態」である。「本質」をこのように捉える場合、「本質」と「仮象」の区別は端的に止揚されている。それ故、「本質」の展開は「仮象」の展開そのものである。そこで、②において「本質」の展開が、③において「仮象」の展開が論じられるわけである。

② ヘーゲルは「本質」を「否定態」として捉え、その展開を三段階に分けて論じている。第一に、「本質」の「否定態」は他者との関係において「否定態」ではなくて、「自体的に否定態 *die Negativität an sich*」である。従って、「本質」の「否定態」は「自己への関係」であるから、「自体的に直接態」である。第二に、「本質」はあくまでも「否定態」であるのだから、「本質」の「自己への関係」は「自己への否定的な関係」であり、「自己を突き放しつつ否定すること」である。これによって、「最初の直接態」は「否定態」に対立する「規定態」となる。第三に、「本質」の「直接態（規定態）」と「否定態」の区別が止揚され、「直接態」は「絶対的な否定態」である。かくして、我々はここでの展開を次のように定式化することができる。「自体的に否定態⇨直接態⇨直接態⇨規定態⇨否定態」→「直接態⇨絶対的な否定態」

この展開の内に、「仮象」を位置づける解釈が試みられるかもしれない。<sup>24</sup> その場合、二番目の「直接態⇨規定態」

が「仮象」を指す、と考えられるだろう。というのも、①では「規定態」は「仮象」であったからである。そうすれば、ここでは①と同様に、「本質」と「仮象」の関係が論じられていることになるだろう。しかし、もしそうだとすれば、二番目の「直接態」のみが「仮象」を指す、ということは不可能である。二番目の「直接態」が生じるのは「最初の直接態」が「否定態」に対立するからであり、またその対立が止揚されることによって三番目の「直接態」が確立されるのである。さらに、「規定態」は必ずしも「仮象」を指すわけではないのである。「本質」が「直接態」としてのみ捉えられ、同時に、「否定態」としては捉えられない場合、ヘーゲルはこの「本質」を「規定態」という直接態と呼んでいる。そうだとすれば、二番目の「直接態」規定態⇓否定態は「本質」の「直接態」でなければならぬ。

我々は②の展開を次のように捉え直すことができると思う。まず最初、本質は自己と相等である。しかし次に、本質は自己を否定し、自己を自己に対立させる。そして最後に、この対立が止揚され、再び本質は自己に相等である。それ故、ここで語られているのは、「本質が自己を否定することを通して自己と相等であること」なのである。

③ ヘーゲルは「仮象」を「否定的なもの」として捉え、その展開を三段階に分けて論じている。第一に、「仮象」は「それ自身のもとで止揚され、空無である。」「すなわち、「仮象」は「否定的なもの自身への関係」である。それ故、「仮象」は「直接態」である。第二に、「直接態」というのは「自立態」であるのだから、非自立的な「否定的なもの」とは異なっている。言いかえると、「直接態」は「否定的なものに対立する規定態、否定」である。第三に、「否定的なものに対する否定」は否定を否定することであるから、「直接態」は「自己自身にのみ関係する否定態」である。かくして、我々はこの展開を次のように定式化することができる。「それ自身のもとで否定的なもの⇓直接態」→「直接態⇓規定態⇓否定的なもの」→「直接態⇓否定態」とすれば、この展開は②と共通である、と言わなければならない。<sup>(26)</sup>

では、この展開の内に、「本質」を位置づけることができるのだろうか。その場合、二番目の「否定的なもの」が「本質」と考えられることになるであろう。というのも、「直接態」に対立した「否定的なもの」とは、「仮象」に對立する「本質」であるように見えるからである。しかし、もしそうだとすれば、②と同様に、二番目の「否定的なもの」だけが「本質」を指す、ということとはできないだろう。却って、「直接態」に對立した「否定的なもの」というのは、「仮象」の二つの契機の對立を意味していると考えなければならぬ。「仮象」が「直接態」としてのみ捉えられ、同時に、「否定的なもの」としては捉えられない場合、「仮象」の「直接態」は「否定的なもの」に對立しているのである。

我々はこの展開を②と同様に表現できると思う。まず最初、「仮象」は自己と相等である。しかし次に、「仮象」は自己を否定し、自己を自己に對立させる。そして最後に、この對立が止揚され、再び「仮象」は自己と相等である。かくして、ここで語られているのは、「仮象が自己を否定することを通して自己と相等であること」なのである。さて、我々は②と③について、②が「本質」の展開であり、③が「仮象」の展開である、という点を強調しておきたい。②は「本質」が「否定態と直接態の統一」であることを示し、③は「仮象」が「否定態と直接態の統一」であることを示すのである。このことは、④によって一層明らかに思う。

④ ここでは、②と③が各々総括される。すなわち、④は「仮象」について示し、これは③に對應する。このことは、④において「直接態と同一な否定態」と表現される。それに対して、④は「本質」について示し、これは②に對應する。このことが、④において「否定態と同一な直接態」と表現されるのである。

「直接態と同一な否定態」と「否定態と同一な直接態」という表現は、従来引用されることはあっても、その意味が理解されることはなかったように思われる。というのも、「直接態」＝「仮象」、「否定態」＝「本質」という先入見に支配されていたためである。もしこのように考えるとすれば、二つの表現の相違は単なる言い換えに帰着せざる

をえないだろう。しかし、この表現は決して言い換えではないのであって、各々が「仮象」と「本質」に対応することは明らかだと思う。

それでは、最後の命題はどのように理解したらよいのだろうか。ヘーゲルは次のように語っている。「本質は、本質が自己自身の内で仮象すること Scheinen である。」この命題は、「本質が仮象へ」と映現する Scheinen」というように考えられるだろうか。もしそうだとすれば、「本質は規定されている」だけにすぎないだろう。それ故、この「映現」は再び止揚されなければならないだろう。これは奇妙ではないだろうか。では、我々はこの命題をどう考えればよいのか。

ここで「仮象する Scheinen」という動詞が使われていることに注意したい。これは「仮象」の展開を指すであろう。とすれば、「仮象する」というのは「仮象が自己を否定することを通して自己と相等であること」を意味している。そして、この「仮象すること」が「自己自身における本質の仮象すること」として捉えられるのは、①で示されたように「仮象」の展開がそれ自身「本質」の展開であるからである。かくして、この命題を我々は次のように理解することができる。「仮象が自己を否定することを通して自己と相等であること」は、「本質が自己を否定することを通して自己と相等であること」にはかならない。

さて、①から④までの展開を考察することによって、我々は「本質」と「仮象」の関係を一応理解することができると思う。我々はその成果を次のようにまとめることができる。(i)「仮象は自己を否定することを通して自己と相等である。」(ii)「本質は自己を否定することを通して自己と相等である。」(iii)「仮象の展開はそれ自身本質の展開である。」それ故、ここで獲得されたものが「本質」と「仮象」の「相関関係」でないことは明らかだと思う。ここでは、「本質」から「仮象」へ、或いは「仮象」から「本質」へ、という往復運動が決して考えられていないのだから。

それでは、「本質」と「仮象」の関係から「反省」はどのように導かれるのであろうか。ヘーゲルは次のように言

っている。「仮象は反省と同一のものである。しかし仮象は直接的な反省としての反省である。(……) 本質は反省である。すなわち、自己自身の内に留まる生成と移行の運動である。」(WdL, 249.) とすれば、「仮象が反省である」というのは、(i) 「仮象が自己を否定することを通して自己と相等であること」を意味するのではないだろうか。また、「本質が反省である」というのは、(ii) 「本質が自己を否定することを通して自己と相等であること」ではないだろうか。果たしてそうだろうか。我々は今や「反省」を主題化しなければならない。

(三)

我々は「本質」と「仮象」の関係を考察した。これによって我々は、「本質」と「仮象」の関係が「相関関係」としては考えられないことを明らかにすることができたと思う。「本質」は「仮象」へ向かうのでもなく、「仮象」は「本質」へ向かうのでもない。「仮象」の展開はそれ自身「本質」の展開なのである。このことは、「反省」の考察によって一層明確な形で理解することができるであろう。

では、我々はヘーゲルの「反省」をどう理解すればよいのだろうか。ヘーゲルは次のように言っている。「本質における生成、本質の反省する運動は無から無への運動であり、それによって自己自身へと還帰する運動である。」(WdL, 250) 或いは、「措定的反省」において次のような表現が見出される。「反省は無から無への運動であり、したがって自己自身と合致する否定である。」(WdL, 250) ここで明らかのように、「反省」は「無から無への運動」であり、それによって「自己自身へ還帰し、自己自身と合致する」のである。しかし、このことは一体何を意味しているのだろうか。

「無から無へ」という場合、「本質から仮象へ」、或いは「仮象から本質へ」という方向が考えられるかもしれない。というのも、「本質」は「否定態」であり、「仮象」は「否定的なもの」であるからである。「本質」と「仮象」はと

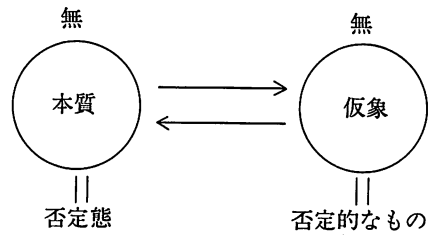


図 1

もに「否定」として「無」である、と考えられるわけである。それ故、我々はこの解釈を次のように図式化することができる。(図1)

このように解釈すれば、「本質」と「仮象」の「相関関係」という先入見にうまく適合するように見える。しかし、この先入見がもはや維持しえないことは、「本質」と「仮象」の関係に即して明らかにされた。とすれば、「反省」についてのこの解釈もやはり維持できないはずである。我々はこの解釈を簡単に検討してみよう。

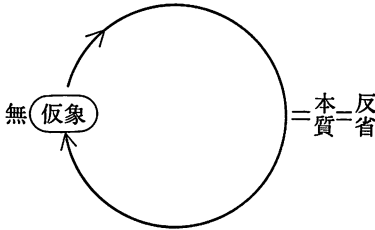
「無から無へ」が「本質から仮象へ」、或いは「仮象から本質へ」であるとすれば、これは「自己自身へ還帰する運動」と言えるのだろうか。確かに、「本質」と「仮象」の区別が止揚されているのであれば、「本質」が「仮象」へ行くこと、或いは「仮象」が「本質」へ行くことは「自己自身に還帰する」と言えるかもしれない。「他者」へ行ったはずが、

その「他者」は、実は、「自己自身」であった、というわけである。しかし、その場合、「自己」は常に読み変えられなければならないだろう。すなわち、「本質は仮象としての自己に還帰する」、「仮象は本質としての自己に還帰する」という具合に。しかし、この読み変えは非常に不自然ではないだろうか。また、「本質」が「仮象」へ行くことを「還帰する」と考える場合、それに先立って「仮象」が「本質」へ行くことが前提されなければならない。というのも、「本質」は元来「仮象」であったからこそ、「本質」は「仮象」に行くことによって「自己自身へ還帰する」ことになるからである。このことは、「仮象」が「本質」に行くことにかんしても同様である。そうであれば、「反省」は「本質」↓「仮象」↓「本質」、或いは「仮象」↓「本質」↓「仮象」ということになるだろう。この場合、「無から無へ」は「本質から本質へ」、或いは「仮象から仮象へ」を意味するのでなければならぬ。とすれば、「無から無へ」を「本質から仮象へ」、或いは「仮象から本質へ」と考える解釈は、それ自身の内部で自己崩壊することになるのである。

る。それでは、我々は「反省」をどう考えればよいのだろうか。

「無から無へ」という場合、我々は「仮象から仮象へ」を意味すると考えなければならぬ。「仮象」は「否定的なもの」であるから「無」である。この「否定的なもの」が否定されることによって、再び「否定的なもの」自身へと還帰する。それ故、この運動は「自己自身へと還帰する運動」である。

それでは、「本質」はどう考えればよいのだろうか。ヘーゲルは次のように述べている。「存在は無から無への運動としてのみあり、それ故存在は本質である。本質はこの運動を自己の内にもつのではない。この運動は絶対的な仮象それ自身として純粋な否定態であって、この否定態はそれが否定するものを自己の外にもたず、ただ自己の否定的なものそのものを否定するにすぎず、しかもこの否定的なものはこの否定することの内だけにだけあるのである。」(WdL. 250)ここで明らかのように、「本質」は「無から無へ」と「反省する運動」それ自身である。或いは、「否定的なもの

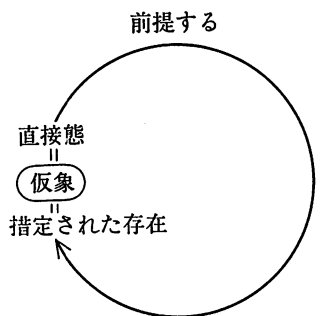


(仮象)」を「否定すること」そのことである。かくして、我々は「反省」について次のように図式化することができるだろう。(図2)

かくして、「無から無へ」は「仮象から仮象へ」であり、「本質」は「反省する運動」それ自身である、と言うことができる。この解釈は、「措定的反省」を考察することによって、その妥当性を確認することができると思う。

図 2 「措定的反省」では、「仮象」が「無から無への運動」として捉えられることによって「措定された存在」と呼ばれる。すなわち、「措定された存在」は「否定的なもの」の自己への還帰としてのみある直接態である。そして、ヘーゲルは次のように続ける。「この直接態は仮象の規定態をなし、以前にはそこから反省する運動が始まるように見えたあの直接態である。その直接態から始めることがで

きるかわりに、その直接態はむしろ還帰として、すなわち反省そのものとしてはじめてあるのである。」(WDL, 251)  
 これに対して、ヘーゲルは「反省」としての「本質」を「措定すること」として捉える。<sup>(28)</sup>「反省は、それが還帰する運動であるかぎり、措定することである。」(WDL, 251)しかし、「反省」を「措定すること」として示した後で、ヘーゲルは「反省」が同時に、「前提すること」であると言う。「反省は、還帰することとして、否定的なものの自己自身との合致として直接態であるが(措定)、反省は同様に否定的なものとしての否定的なものの否定である。それ故、反省は前提することである。」(WDL, 251)かつこ内は筆者)では、「措定すること」と「前提すること」はどう考えたらよいのだろうか。我々はここであらかじめ次の図式を提示することにしたい。(図3)



「反省」としての「本質」が「前提すること」であるのは、「反省」が「直接態(否定的なもの)」を否定するからである。というのも、「直接態」を否定するためには、「直接態」を「前提する」のでなければならぬからである。これに対して、「反省」が「措定すること」であるのは、「直接態」が「還帰すること」としてのみあるからである。しかも、前提された「直接態」と「措定された存在」は同一のものである。「直接態は一般に還帰としてのみ生じ、そして端初の仮象であるあの否定的なものであるが、この端初は還帰によって否定される。」(WDL, 251)

さて、「反省」についてのこうした理解を、我々は(二)の議論と関連づけてみることにしよう。(二)において、我々は次のことを獲得した。(i)「仮象は自己を否定することを通して自己と相等である。」(ii)「本質は自己を否定することを通して自己と相等である。」(iii)「仮象の展開はそれ自身本質の展開である。」では、この成果は「反省」についての理解と整合的であるだろうか。

(i)は「無から無への運動」に対応している。「仮象が自己を否定する」という

のは「無から」を示し、「仮象が自己と相等である」というのは「無へ」を示す。こうして、「仮象」は「措定された存在」である。しかも、ここで指摘すべきであるのは、以前に「仮象」の「直接態」が「反省された直接態」と呼ばれていたことである。この「反省された直接態」は「措定された存在」を意味するのである。

(ii)は「本質」が「反省する運動」であることを示している。まず「本質が自己を否定する」というのは「前提すること」を示し、次に「本質が自己と相等である」というのは「措定すること」を示している。というのも、ヘーゲルによれば、「前提すること」は「自己を突き放すこと」であり、「措定すること」は「自己へ到来すること」であるのだから。

(iii)は「反省」が一箇同一の事態であることを示している。「無から」は「前提すること」の内にのみあり、「無へ」は「措定すること」の内にのみある。

かくして、「反省」についての我々の理解は、「本質」と「仮象」の関係に即しても妥当であるだろう。もう一度強調して言えば、「反省」は決して「相関関係」ではないのである。では「反省」は一体何であろうか。

「反省」は「自己から出発して自己へと還帰すること」として一つの「円環」を形成している。「仮象」は「無から無への運動」として「円環運動」であり、「本質」は「自己を突き放しつつ自己へと到来すること」として「円環運動」である。

(四)

「反省」についての考察によって、我々は「反省」が「本質」と「仮象」の「相関関係」ではないことを明らかにすることができた。とすれば、「反省」は「相関関係」とは全く無縁のものなのだろうか。我々は否であると答えなければならぬ。しかし、それは何故なのだろうか。

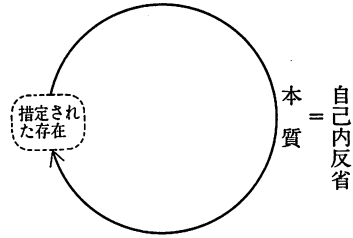
ここで注意すべきであるのは、「相関関係」が「反省諸規定」において成立する、ということである。ところが、「反省諸規定」は「反省」の展開によって到達されるのである。とすれば、「相関関係」は「反省」から生じる、と言うことができる。しかし、それ自身は「相関関係」でない「反省」から、いかにして「相関関係」が生じるのだろうか。このことを理解するために、我々は「反省」の展開を考察しなければならない。

さて、我々は「反省」の展開をどう考えればよいのだろうか。ヘーゲルは「反省」を三つの段階に分けている。すなわち、1「措定的反省」、2「外的反省」、3「規定的反省」である。そして、「反省諸規定」は「規定的反省」において到達されるのである。それ故、我々は「措定的反省」から「規定的反省」までの展開を理解しなければならぬ。

第一に、ヘーゲルは「措定的反省」を次のように捉え直す。「措定された存在は直接的なものであるが、しかし自己自身に等しいものではなく、自己を否定するものとしてある。措定された存在は自己内還帰への絶対的な関係をもっている。すなわち、措定された存在は自己内反省 Reflexion in sich の内のみあるが、この反省そのものではない。」(WDL. 255) ここでのポイントは、「措定された存在」が「自己内反省の内」にのみあって、「自己内反省そのもの」ではない、ということである。しかし、「自己内反省の内にある」と「自己内反省をそのものではない」というのはどう理解すればよいのだろうか。

「自己内反省の内にある」というのは、「措定された存在」が「本質」の「反省する運動」の内にあることを意味する。それ故、この場合の「自己内反省」は「本質の自己内反省」である。だからこそ、次のように表現される。「措定された存在は本質の顧慮において措定された存在であるにすぎず、自己自身に還帰した存在（本質）の否定として措定された存在であるにすぎない。」(WDL. 256 かっこ内は筆者)

それに対して、「自己内反省そのものではない」と言われる場合、「措定された存在」にかんして「自己内反省」が



否認されているのである。ここで「自己内反省」というのは自立的な直接態を意味している。というのも「自己内反省」は「自己への関係」として、「他者への関係」を免れているのだから。かくして我々は、「措定的反省」にかんじて次の図式を提示したい。(図4)

図 4 それでは、「指定された存在」がそれ自身「自己内反省」という意義を獲得するのはどこであろうか。それは第二の「外的反省」においてである。というのも、「外的反省」は「直接的なもの」を前提し、そこから「反省する運動」を始めるのであるが、この場合「直接的なもの」は「自己内反省」であり、「自己への関係」と考えられているのだから。<sup>32)</sup> それ故、「外的反省」では「直接的なもの」は自立的なものとして、「本質」の「反省」に對立するのである。そこで、我々は「外的反省」を次のように図式化することができるであろう。(図5)

では、第三の「規定的反省」はどう考えればよいのだろうか。「規定的反省」は一般に措定的反省と外的反省の統一である。「(WdL. 255)」とすれば、「措定された存在」は二つの側面をもつであろう。一方で「措定された存在」は「措定された存在」として「否定」であるが、他方でそれは「自己内反省」である。この二つの側面をもつ「措定された存在」が「反省規定」である。それ故、我々は「規定的反省」を次のように図式化することができるであろう。(図6)

「措定的反省」では「本質」が「自己内反省」であったが、「措定された存在」はそうではなかった。しかし、「規定的反省」では「措定された存在」がそれ自身「自己内反省」である。それについて、ヘーゲルは次のように言っている。「措定された存在が規定へと自己を固定化するのは、まさに反省がその否定された存在(措定された存在)において自己自身との相等性であるからである。それ故、反省の否定された存在がそれ自身自己内反省である。」(WdL.

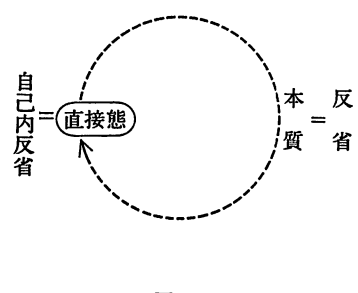


図 5

256 かつこ内は筆者)このように、「本質」の「自己内反省」が「措定された存在」の「自己内反省」へと移行するのであるから、「反省規定」は「本質態」と呼ばれることになる。

さて、「反省諸規定」において「相関関係」が成立するというのはどう考えたらよいのだろうか。少くとも、今までの展開では、「相関関係」は成立していないのである。

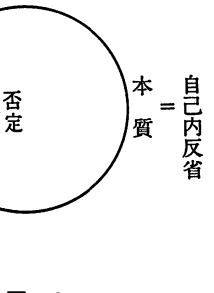


図 6

ヘーゲルは、「反省規定」が「措定された存在」であると同時に「自己内反省」である、ということから「他者」を導入する。「措定された存在」として、反省規定は否定そのものであり、他者、すなわち絶対的な自己内反省、言いかえると本質に対立する非存在である。しかし、自己への関係として、反省規定は自己へと還帰している。(……)措定された存在が同時に自己内反省であるかぎりで、反省規定態はそれ自身のもとで自己の他在への関係である。(WDL. 257) すなわち、「措定された存在」は「他者への関係」を意味し、「自己内反省」は「自己への還帰」を意味するのである。かくして、ヘーゲルは次のように言う。「反省規定はその他在への関係を自己の内へ取り戻す。反省規定は措定された存在・否定であるが、しかしこの否定は他者への関係を自己へと曲げ戻している。従って、この否定は自己と相等であり、自己自身と自己の他者との統一であり、そのこと

によつてのみ本質態である。」(WDL. 257) それ故、我々は「反省規定」を次のように図式化することができるであらう。(図 7)

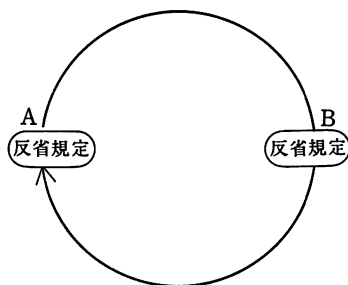


図 7

この議論で注意すべきであるのは、「他者」があらかじめ前提されているのではない、ということである。むしろ「反省規定」の二つの側面から「他者」が導出されるのである。

以上の考察によって、我々は「反省」から「反省諸規定」への展開を理解することができると思う。「反省規定」は「他者への関係を自己へと曲げ戻す」のであるから、ここではじめて「相関関係」が成立するのである。

(五)

我々の課題は『論理学』における「反省」の構造を明らかにすることであった。それは「反省」が「相関関係」から理解されているのかどうか検討することを意味した。我々は(二)から(四)までの考察によってその課題を果たすことができたと思う。しかし、我々の考察は「反省」の語義に果たして妥当するであろうか。

「反省」の語義として最初に思い浮かぶのは、おそらく「光の反射 Reflexion」ではないだろうか。実際、ヘーゲルの「反省」が一般に説明される場合、「光の反射」の表象は好んで使われている。しかも、「相関関係」を示すため<sup>33</sup>である。しかし、「光の反射」は「相関関係」を示しているだろうか。

ヘーゲルは『エンチクロペデー』において次のように言っている。「反省という表現はまず光について、光が直進して反射面に突き当たり、そこから投げ返される場合に使われる。したがって我々はここで二重のものをもっている。まず第一に直接的なもの、存在するものであり、次に第二に媒介されたもの、すなわち指定されたものである<sup>34</sup>。」では、ここで一体何が語られているのだろうか。

ここで語られているのは、「光の反射」が「自己への還帰」である、ということである。だからこそ、「光の反射」に続けて、ヘーゲルは「直接的なもの」と「措定されたもの」という「二重のもの」を語ったのである。「直接的なもの」は「自己への還帰」として捉えられるとき、「措定されたもの」なのである。この場合、「仮象」が「二重のもの」に相当し、「本質」は「光」そのものであるだろう。とすれば、この構造は我々が(三)において提示したものなのである。

しかし、「光の反射」では「反射面」を考える必要があるのではないだろうか。このような反論が予想される。そうであれば、「光の反射」は次のようになるはずである。「一方が他方へと突き当たり、そこから曲がり戻って自己へと還帰する」という具合に。このことは他方にかんしても同様であるから、「光の反射」は「相関関係」を示している。これが「光の反射」の最も通俗的な表象ではないだろうか。

これに対して、我々は次のことを注意しなければならない。この「相関関係」が成立するのは「反省諸規定」においてなのである。このことを、我々は(四)において示すことができたと思う。そうではなくて、「本質」と「仮象」の関係においてこの表象が使われるとすれば、それは根本的に誤ることになるのである。それは(二)で示された通りである。

かくして、「光の反射」の表象にかんして我々の考察は完全に妥当する、と行うことができる。「光の反射」の意味は、我々の考察に基づいてのみ真に理解されうるのである。

ところで、「反省」の語義は基本的にはラテン語の reflexio に即して考えるべきではないだろうか。ヘーゲルは「反省」が「外国語」であることを殊更強調しているのである。では、reflexio とはいかなる意味であろうか。

reflexio は re-flexio として「曲がり戻ること」である。すなわち、reflexio は「自己への還帰」として理解されなければならない。とすれば、この reflexio の内には、「他者」は含意されていないであろう。むしろ、reflexio

は「自己から出発して自己へと還帰すること」である。それ故、「反省」は一つの「円環」として理解されなければならない。

『論理学』における「反省」は「自己から出発して自己へと還帰すること」として、一つの「円環」を形成している。このように「反省」を理解することによってのみ、我々は「反省諸規定」の意味を捉えることができ、更には「本質論」全体に接近することができるのである。というのも、「反省諸規定」が「反省諸規定」であるのは、各々の規定が他方を媒介として自己へと還帰する、かぎりにおいてであり、しかも「本質論」全体が「反省諸規定の体系」であるからである。<sup>(36)</sup>「本質」は「反省」から理解されるべきであり、「自己から出発して自己へと還帰する円環」として把握されなければならない。

さて、「反省」が「自己から出発して自己へと還帰する円環」であるとすれば、我々は『精神の現象学』の序文における「主体」へと導かれるであろう。ヘーゲルは次のように言っている。「生き生きとした実体は主体として純粹で単一な否定態であり、それによって単一なもの二分化である。すなわち、対立的に二重化することであるが、その二重化は再びこの没交渉的な差異性とその対立の否定である。このように自己を再建する相等性、すなわち他在における自己自身への反省 Reflexion im Anderssein in sich selbst が真なるものであって、根源的な統一そのもの、すなわち直接的な統一そのものが真なるものではない。真なるものは自己自身の生成であって、自己の終りを自己の目的として前提し始めとしてもち、ただ実現と終りによってのみ現実的である円環である。<sup>(37)</sup>」

ここでの論理は、「本質が自己を否定することを通して自己と相等であること」として定式化されたものと同じではないだろうか。しかも、それはまさしく「反省」であった。とすれば、「反省」は「主体」なのだろうか。

確かに、ヘーゲルはこの序文において、「主体」を「自己自身の内で反省する運動」、あるいは「自己へと反省したもの」と言いかえている。とすれば、「主体」は『論理学』の「本質論」において到達されることになるのではない

だろうか。

しかし、『論理学』に即して言えば、「主体」が到達されるのは「本質論」ではなく、却って「概念論」である。「本質論」の最後において「実体」が論じられ、そこから「概念論」の「主体」へと移行するのである。そうであれば、我々は単純に「反省は主体である」とは言えないと思う。

では、「反省」と「主体」の関係はどう考えればよいのだろうか。これを理解するためには、「本質論」から「概念論」への移行を検討しなければならない。かくして、我々は新たな課題に直面するのである。「論理学」における「反省」の構造を明らかにする試みは、『論理学』における「主体」の検討へと向かうであろう。

## 註

- (1) G. W. F. Hegel: *Wissenschaft der Logik. Gesammelte Werke*, Bd. 11. 以下、『論理学』からの引用は特別な事情がなからず、すべてこの書による。その場合、WdL. と略記し、ページ数のみを記す。
- (2) 「本質論」の第一編「自己自身における反省としての本質」だけでなく、第二編「現象」、第三編「現実態」もまた、「反省」によって展開されている。これは、第二編及び第三編の序論において明確に示されている。(Vgl. wdl. 323f. 369)
- (3) D. Henrich: *Hegel-studien*, Beiheft 18, VII.
- (4) ロックは外的事物の「感覚 Sensation」に対して、「我々の内の我々自身の心のさまざまな作用についての知覚」を「反省 Reflexion」と呼ぶ。(cf. J. Lock: *An Essay concerning Human Understanding*, Book II, chapter I.)
- (5) カントは『純粹理性批判』において、「ある心の状態に於いて諸概念が相互に帰属し、或る関係を「反省概念」と名づけ、「一様性と差異性」、「合致性と反対性」、「内的なものとの外的なもの」、「質料と形式」の四つの組を挙げている。(Vgl. I. Kant: *Kritik der reinen Vernunft*, Philosophische Bibliothek, S. 310)
- (6) 例えば、クーン・フィッシャーは次のように言っている。「ハーゲルは、彼が本質の概念と等置する反省を単に一面的にではなく、二重に捉える。すなわち、単に一面が反省するものであり、他方の側面は反省されるものであるというようにではなく、両側面の各々が他の側面を反省すると同様に、その他の側面によって反省されるというように捉える。両規定は、各

- 々が他方の規定を投げ返す（反省する）とともに、各々が——ヘーゲルの好みの表現では——他方の規定において仮象する *scheinen*（他方の規定によって反省される）というように相互に関係しよう。Aの概念は私にBの概念を思惟し、しかもこの概念以外の何物をも思惟しないように強いるのである。又逆の場合も同様である。二つの概念は同一化されることも、分離されることもできない。」(K. Fischer: *Hegels Leben, Werke und Lehre*, 1 Teil, S. 489)
- (7) 例えば、ステースは「二つの項の相互的な依存はヘーゲルによって反省と呼ばれる」と述べ、この部分に「光からの類比」と註を加えている。(N. T. Stace: *The Philosophy of Hegel*, p. 180) 尚、光の反射の意味については、本稿(五)におき論じられる。
- (8) (9) G. W. F. Hegel: *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften*. Werke in zwanzig Bänden. Bd. 8. s. 232, 231.
- (10) これについては、本稿(五)を参照。
- (11) 「ヘンチクロクニヤマーにおける省略は改善である」と明確に述べられている。(J. E. McTaggart: *A Commentary on Hegel's Logik*, p. 93)
- (12) 従来の解釈では、「反省」論が序論へと移された、とどう事実すら気づかれてきた。「論理学」との差異を完全に無視するか、あるいは「反省」論が省略されていると考えるなど、いくつかの解釈に陥っている。
- (13) 「逆説的な性格」とどう表現はヘンリッヒにやめ。Vgl. D. Henrich: *Hegels Logik der Reflexion*. Neue Fassung. In *Hegel-Studien*, Beiheft 18. S. 237f.
- (14) 「否定態」の多義性については次のものを参照。H. P. Falk: *Das Wissen in Hegels Wissenschaft der Logik*. S. 107ff. 又、「直接態」の多義性についてはヘンリッヒの前掲論文、及び次のものを参照。D. Henrich: *Hegel in Kontext*, S. 110ff.
- (15) この箇所の本格的なコメンタリーを試みたのはヘンリッヒである。我々は彼のコメンタリーに教えられる所が多かった。しかし、我々は彼の基本的な主張、及び細部の解釈において彼と一致していない。しかし、本稿はヘンリッヒとの対決が目的ではない。ヘンリッヒのコメンタリーは「否定態」や「自己関係」に対する独自の理解に基づいて構成された、きわめて包括的な論稿であるが故に、ヘンリッヒとの対決は「否定態」・「自己関係」に対する根本的な検討を必要とするであろう。そのことを我々は改めてなしたいと思う。

- (16) M. Theunissen. *Sein und Schein*. S. 353.
- (17) ここで我々は Sein 動詞が使われつつあることに注意しなければならぬ。「指し示す」「基へ」とはなべて、端的に「である」とある。
- (18) フランクはこうした解釈を述べている。Vgl. H. P. Falk: *Das Wissen in Hegels »Wissenschaft der Logik«* S. 107ff.
- (19) 「直接態」の最も基本的な意味は「自己との関係」・「自己との相等性」である。クーゲルは既に、「純粹存在」・「純粹無」を「自己との相等性」として示している。(Vgl. WdL. 43f.) そして、「自己との関係」・「自己との相等性」ということから「直接態」のさまざまな性格が生じる。「自己との関係」であるが故に、「直接態」は「他者への関係」を欠いた「無媒介態」である。そして、「他者への関係」を免れつつあるが故に、「直接態」は「自立態」ともいえる。
- (20) ここで「直接態」は二つに区別されなければならない。一つは「自己の否定」を含まぬ「単なる自己との相等性」とあって、「存在する直接態」と呼ばれる。もう一つは、「自己の否定」に媒介された自己との相等性」であって、「反省された直接態」と呼ばれる。「仮象」と「本質」の「直接態」が後者の「反省された直接態」であることは明らかである。
- (21) この箇所を説明を試みたのは、我々の知る限り、クニツマツとである。Vgl. D. Henrich: *Hegels Logik der Reflexion. Neue Fassung*. In *Hegel-Studien*. Beiheft 18. S. 252ff. したがって、彼の註文はよくそのこの箇所の展開を十分明らかにしている。
- (22) 例えば、見田石介氏は『ヘーゲル大論理学研究②』において、②'③'④'⑤'⑥'を省略して説明されている。同書 56～59 頁参照。これに対して、デュバルは②'のみを議論している。D. Dubarle: *La logique de la réflexion*. In *Hegel-Studien*. Beiheft 18. pp. 177—183.
- (23) Vgl. WdL. 77. あるいは『論理学』の第二版では次のように言われている。「第一の否定、即ち否定一般としての否定は第二の否定、即ち否定の否定から十分区別されなければならない。この否定の否定は具体的に絶対的な否定態であって、これに対して第一の否定は抽象的な否定態であることが知られる。」(G. W. F. Hegel: *Wissenschaft der Logik I*. Philosophische Bibliothek. S. 103)
- (24) テンニールは明らかにこの解釈を提示している。D. Dubarle: *La logique de la réflexion*. In *Hegel-Studien*. Beiheft 18. pp. 179—182.
- (25) Vgl. WdL. 249.

- (26) ②と③の展開が完全に同一の論理に基づいている、ということとは従来明確にされていなかった。
- (27) 例えば、寺沢恒信氏は、『大論理学2』の訳註において、「否定的なものそのもの」を「絶対的否定態としての本質」と理解されている。同書289頁参照。
- (28) 武市健人氏は『ヘーゲル論理学の世界』中巻において、「本質」をも「措定された存在」と解釈している。この解釈の前提になっているのは、「本質」と「仮象」の「相關関係」という先入見である。同書389頁参照。しかし、「本質」を「措定された存在」と解釈することは不可能だと思ふ。
- (29) 本稿(四)―(一)参照
- (30) Vgl. WdL, 252.
- (31) それ故、「反省」の「運動は前進することとして直接に自「自」自身の内で向きを変え、そのようにしてのみ自「自」運動である」と言われる。(WdL, 252.)
- (32) Vgl. WdL, 252f.
- (33) 「反省」を「自我の活動」として解釈するライジンガーでさえ次のように言っている。「『反省、という表現は光学において鏡面による光線の屈折のために使用される。』(P. Reisinger : Reflexion und Ichbegriff. In Hegel-Studien. Bd. 6. S. 231.)
- (34) G. W. F. Hegel : Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften. Werke in zwanzig Bänden. Bd. 8. S. 232.
- (35) Vgl. WdL, 249.
- (36) Vgl. G. W. F. Hegel : Wissenschaft der Logik I. Philosophische Bibliothek. S. 44.
- (36) G. W. F. Hegel : Phänomenologie des Geistes. Philosophische Bibliothek. S. 20.